

## 「第1分科会」

### ひきこもりから見る青少年問題

NPO 法人地球家族エコロジー協会理事長 中光 雅紀

最初に、私が行なっている活動を簡単に紹介します。現場からの視点で聞いていただければと思います。現場では、小中学校の不登校から、上は40代のひきこもりの相談に対応しています。非常に長期化が進行し、当事者も高齢化して、数日前には48歳の相談がありました。親御さんの年齢ではなく当事者の年齢です。義務教育の中の不登校でも、長期化してきている実感があります。

皆さんには、不登校やひきこもりに対するイメージがあると思います。不登校にしてもひきこもりにしても、精神的なものが非常に弱い、甘やかされて育った、甘えんぼうであるとか、そういうイメージがどうしてもあります。確かに表面的に見るとそう見えてしまうところがありますが、甘やかされたというよりも、甘えることが許されなかった子どもたちなのです。必要なときに、その甘えることができなかつた子どもたちが多いのです。

ひきこもりは年齢が高くなり、今関わっているのは30代が一番多いです。一番長いケースは20年です。そういった青年たちは、やはり自立できていないわけです。単に精神的に弱いという問題ではなく、他者と協調して関わっていくこと、自分の意思や要求を相手に伝えて、それを実現していく部分が、上手くできない状態になっているのです。

その背景にあるのは、社会性の未成熟ということです。社会性には、必ず自分と自分以外の存在があります。その自分以外の存在とのあいだで、まず自分を表現する自己表現が必要です。今自分が何を考えて、また何を感じているか、そういったことを十分に他者に伝えることができないと、当然コミュニケーションの中で不信感や不都合がでてきます。

もう一つは、他者理解です、相手を理解することができないと、はたから見ると自己中心的に見えてしまいます。自分の言い分ばかりで人の話を聞かない。この自己表現と他者理解のどちらか一方ができなくても、コミュニケーションは十分に取れないわけです。両方できなければ、当然ながら他者と関わっていくことが困難になっていくわけです。不登校やひきこもりの状態になっている青少年たちに共通しているものは、他者との関わりを作れない状態になっていることです。

不登校やひきこもりのイメージは、外出できないとか、重篤なひきこもりの場合は、数年間部屋から出ないで過ごしているといったイメージがあると思います。最近のひきこもりの相談の中には、外出型のひきこもりも多いです。ひきこもりは外出できないからひきこもりではないかと思いますが、近所には普通に外出できるわけです。隠れひきこもりとも言います。隠れというのは表面的にはひきこもりに見えないのですが、現実的にはひきこもっているということです。私どものところに相談の電話が入ったときに、家の子はひきこもりではないかと前置きがあります。ひきこもりではないと言うのは、どういうことかと聞くと、外出はしているというわけです。外出はしているが、35歳を過ぎても仕事もせずに家にいると言います。それは正真正銘ひきこもりですよと申し上げています。ひきこもっている青年たちは、他者とのコミュニケーションが取れないわけですから、社交辞令程度の挨拶が可能な

青年たちはいます。ただそういった青年たちも、親密になっていくことができないので、親しくなるとパニックになるのです。

ある青年は仕事もしていますが、転職を繰り返します。新しい職場に入ってしばらく経つと、当然毎日顔を合わせますから親しくなって、人間関係が自然にできあがります。そうすると頭がパニックになって会社を辞めるのです。もちろんそのままだと生活できませんから、すぐ仕事探しを始めます。その青年はパソコンの技術を持っていたので、比較的工作はすぐに見つかり、それでまた仕事をする。ある程度の期間になると親しくなる、そしてまた辞める。そういうふうに人間関係ができてくると恐怖心や不安感が募ってきて、仕事ができなくなるパターンもあります。

一般的なひきこもりの青年たちは、人と全く話ができないのではなくて、関係を構築していくことができないわけです。だから昔ながらの友だちとは長年付き合いがあるが、新しい人間関係が怖いからほとんど対外的な生活はしないのです。こういったパターンのひきこもりも最近多いです。

ひきこもりのイメージとして、外出しない、部屋から出ないだけではなくて、健全な人間関係を何らかの理由で結べない状態で、対外生活が極めて困難になっている青年たちが、ひきこもっている状態と認識していただければと思います。こういった青少年たちの健全育成ということで自立というわけです。当然自立させる必要はあるのですが、自立させる前に、自律の問題があります。

自律は、自分で自分をコントロールできる。例えば、夜更かしして朝起きられない、睡眠や食事のコントロールもできない、そしてやらなければいけないごく簡単なことすらできない。風呂に入るのも面倒くさくなって月に1回、もう数カ月も入っていないとか、そういったケースもあります。まず自立させていく前には、セルフコントロールということで、自分自身をコントロールする、自律ができるようになってからでないと、次のステップの自立に進むことは現実的には難しいです。

大人になってからひきこもりになった場合、ほとんどの親御さんがいつになったら仕事するんだ、バイトの一つもやればいいではないかと言います。表面的にはだらだらと好きなきにテレビを見て、パソコンをしている姿を見ているので、つつい言葉をかけてしまいます。親御さんたちも状況が分かりませんから、働く場さえあれば、働けるのではないかという感じなのですが、ほとんど働きません。それはそれ以前の問題を抱えているからです。

なぜ他者の関係を作れない状況になっているかです。先ほど、社会性の未成熟、社会性が育っていないところで、自己表現ができないと言いましたが、自己表現は自分を他者に伝えることです。自分を分かっているのと、自分のことを他に伝えることはできません。例えば、AさんのことをBさんに伝えるとき、自分がAさんのことを知らなかったら伝えることはできません。不登校やひきこもりの状態になっている多くの青年たちは、ここで止まってしまいます。伝えるべき自分を知らないでいますから、伝えようがないのです。

自分を表現するためには、まず自己認識で自分を知ることが必要なのです。自己評価は、自分が自分をどう見ているかということです。他者評価は、周囲が自分のことを、どう見ているかということです。それがちょうど重なったところが自己認識です。まず周囲から自分がどういう人間と見られているか、そして自分自身が自分をどう受け止めているか、これによって自己認識が決まってきます。

ここで問題になってくるのが自己評価です。不登校やひきこもりの青年たちは、100%とい

っていいほど、自分のことを好きかと聞いたら嫌いだと言います。大体自分のことを大嫌いだと言います。自己評価がすこぶる悪いのです。自分のことが大好きですと言って、不登校やひきこもりになることはまずあり得ません。母親になぜ生んだの、何でお父さんと結婚したのと言う子もいます。いずれも自分自身の存在そのものを否定しているのです。なぜ自分をこの世に誕生させたのかと、そこまでの自己否定なのです。

自分はゴキブリ以下だから社会に出る価値はないと言った青年もいました。そこまで自己否定感が強まっている要因には、罪悪感と恥辱感があります。実はこの部分に、我々親や大人が深く関わっています。子どもたちが、何で自分をそこまで卑下してしまうのか、その背景にあるのが罪悪感、恥辱感ですが、この罪悪感とは自分が悪いことをしていると思っただけです。不登校になっていることを、悪いことをしていると思っただけの子が多いです。真面目な子がなりやすいと一般的には言われますが、自分が学校に行っていないことを、あたかも自分が犯罪でもしたくらいの感じで、悪いことをしていると思っただけです。親にも心配をかけ、先生や学校にも迷惑をかける。そういう悪いことをしていると感じています。ひきこもりも、本来であれば働いて税金を納めなければいけない歳になっても、家の中でじっとしているわけですから、自分に対しての罪悪感を抱えてしまっているのです。

恥辱感とはもっと性質が悪く、先ほどは自分の存在そのものを否定していると言いましたが、この恥辱感が存在に関わる部分です。自分の存在を恥ずかしい存在だと思うわけですから、世の中にいらないのだと思うわけですから。こういった子どもたちが罪悪感だとか恥辱感を過度に持っているのです。私は子どもたちに、わざとなぜなのかと聞きます。子どもたちは、俺不登校だよと言うので、不登校の何が悪いのと言うと不思議な顔をします。子どもたちに、不登校が悪いことだという考えを入れたのは我々大人です。

子どもたちに罪悪感や恥辱感を与えてしまうのは、躰の現場です。躰は、身が美しくなると書きます。たしかに躰をすると、礼儀正しくなるし品性も出ます。見た目をしっかりさせることになるのです。先ほどの基調講演で教育は教える側面と、育てる側面があるという話でしたが、どうしても躰の場面になると教える方のウェイトが高くなります。この躰の場面で罪悪感が子どもたちに植えつけられてしまうのは、よくない行為や行動を取った際にダメ出しをしますが、自分の行為や行動にダメ出しをされたときに、子どもたちは自分が悪いことをしてしまった感覚で罪悪感を持ってしまいます。

恥辱感とは、躰の場面で、その行為や行動だけをたしなめていけばいいところを、さらにエスカレートさせて、その子の存在までも否定してしまう。そのときに子どもの中に恥辱感、つまり自分の存在に対して恥じるという感情がでてきます。行為や行動そのものをたしなめて、そういうことはやっては駄目だとやり直させればいいわけです。ところが上手くできずにしくじったときに、お前は悪い子だ、駄目な子だと言うのは、日常生活の中でよく聞きます。我々親や大人は何気なく使っています。躰として悪意なく使っているのです。

ある中学校の先生が校則違反をした子を捕まえて、あなたは人間失格と言ったわけですから。校則を守らないといけないことは分かります。ただ校則を守れなかった状態に対して、人間失格と言うのはどうかと思います。私は、どうして悪いのかこの校則の意味を先生に聞きました。それは決まりだからと、答えられない先生が多いです。とにかく躰の場面はダメ出しをしてしまうことが多くなるわけですが、やはり行為や行動をたしなめることは必要です。たしなめ方で最もまずいのは、人間ですから誤りもありますし、やり直せばいいだけのことですが、その一度二度の失敗に対して、あなたは悪い子だ、いつも三日坊主で何も続かない、

根性無しとか言われると、子どもたちは自分の存在そのものを完全に否定してしまいます。

お父さんとお母さんが子どもの成績や素行が原因で、大きな声で夫婦喧嘩をしている。子どもは、自分のためにお母さんが怒られている、自分がいなければいいのだと、そんな感じで受け止めていることも少なくないのです。子どもは自分のことで、夫婦喧嘩やお母さんがお姑さんから注意されていると、子どもは自分を否定するようになります。自分がいるからお母さんも嫌な思いをしていると苦しみます。

自分を知ることでもう一つは、自分らしさの無自覚です。これは自分自身の欲求が分からない、自分の感情が出せないことです。皆さんは自分自身の欲求をちゃんと自覚できていますか。そんなの当たり前、腹が減ったら飯を食うし、酒が飲みたくなったら飲むし、自分の欲求は全部分かっているつもりだと思いますが、意外に人間は自分の欲求を全て分かっているわけではないようです。特にその欲求をあからさまにできないとき、人間は自然とその欲求を抑え込み、心の奥に沈めてしまうのです。一生懸命忘れようとするが、欲求は充足されないとなかなか消えないものです。

百八つの煩悩と言うぐらいですから、忘れた気になっていますが、心の奥底で燻っています。それが何かのきっかけでポンと出るときがあります。それが、魔が差したということです。あんなにきちんとやっている人が、なぜあんなことを起こしてしまったのだろうということが、よくニュースになります。そういったことは欲求を抑え込んでいた状態なのです。不登校とかひきこもりになる青年たちに、今お金があったら何が欲しい、やってみたいことは何と聞くと、ほとんどの子は何もないと言います。自分の欲求が本当はないのではなく、分からなくなっているのです。感情もそうです。私が彼らに最初に会ったときは、大体みんなの表情は能面みたいです。ニコッとしません。

たびたび自宅を訪問している青年がいますが、もう2年近く両親にも顔を見せていません。ようやく部屋には入れるようになりましたが、親御さんにも私にも言葉は発しません。ただコミュニケーションは、私が言ったことに筆談で返してくれます。そこまでコミュニケーションが取れるようにはなりませんでした。ただ顔は両親にも私にも隠したままです。

ほとんどの子どもたちが、欲しいもの、やりたいこと、行動の原動力になるものが減退しています。そして喜怒哀楽という感情が出せない状態になっています。なぜできなくなってしまったのか。欲求と感情はまさにその人らしさなのです。皆さんもそれぞれ求めていることは違います。食べ物の好みも100人100様です。感情もそうです。一輪の花があっても、その花に対して受け止める感情はみんな違います。だからその人らしい独自性を表すものに、何があるかという、それが欲求と感情です。

個性を一番表現しているものが欲求と感情です。欲求と感情が違うから装うものも違ってくるのです。それを美しいとか可愛いと思うから、それを装っているのです。そうであれば、欲求と感情が減退するとどうなりますか。個性の表現は無くなってしまい、個性が見えなくなり、これが私ですという独自性が失われます。独自性がない人は、集団生活の中で生活ができません。集団の中に入ることは恐怖でしか無くなるのです。これが私ですという独自性を自覚できていれば、出て行って、見て見てということになるのです。でも自分の独自性を自覚できていなければ、人の目に自分をさらすことは苦痛以外の何物でもないのです。恐怖ですから、外出できずに部屋から出ないわけです。重篤なひきこもりの青年たちは、我が家にいながら家族の前にも姿を出さない。家族の目に自分がさらされることに対しても恐ろしいわけです。それほど自分を見失ってしまっているのです。

なぜ自分を見失い、自己喪失になってしまっているのか。自分をしっかり自覚できて、自分が大好きだと健全な自己愛を持てるようになるためには、周囲からの承認が必要です。私は毎日、子どもから成人までの話を聞いています。彼らの声で一番多いのが承認、つまり親に認めてもらいたい、認めてもらえなかった。もう一つは、理解してもらえていない、分かってくれない。つまり親から期待されたい、信頼されたいと思っているのです。

ところが、我々が考えている期待と信頼とは、ちょっと違うようです。子どもたちが言っている期待と信頼は、あるがままなのです。ありのままの私を信頼してくださいと思っているのです。親は、俺の息子だからこうなって欲しいとか、私の娘だからこうなってほしいと思うものです。

いつもこの話の時は、我が家のことを話します。末娘は中学生ですが、小学校3年生のころにピアノを買いました。家内に聞くと、娘は習いたいと言わないが、私が習わせたい、そしてピアノの上にフランス人形を飾りたいと言うのです。自分が小さいときに、お金持ちの家に遊びに行き、そこにはグランドピアノと決まってフランス人形が置いてあった。自分が母親になったら必ず娘にピアノを習わせて、フランス人形を飾りたかったと家内は言いました。こういうことは皆さんもあるかと思います。男の子だったら、お父さんは甲子園行けなかったから、おまえは甲子園に行け。これは自然ですが、イチローとイチローみたいに、たまたま親の願いと本人のスキルや個性と方向性が一緒であれば良いのです。星飛雄馬も才能があったから伸びたが、才能がなかったらひきこもっています。親の期待がどうしても、親の欲目というフィルターを通過しての期待ですから、はっきり言って少し歪んでいます。

ありのまま。勉強ができなくても、スポーツができなくてもいいじゃないですか。それが個性です。個性は良いところだけでなく、悪いところもひっくるめて個性です。長所短所という見方自体を見直した方がいいです。個性で見ると。持っている性質を誤って使っている場合が短所になってしまっているのです。例えばとてもエネルギー的な性質を持っている子が、いつも喧嘩ばかりして人を殴っているのはまずい使い方です。でも、その子が大きくなって格闘家になるとか、武道をやって試合に勝つとか、そういうことに使えばいいわけです。要は個として持っている性質を、どのように使うかです。子どもたちは、そのまま、あるがままを認めてほしいということです。

条件付きの愛情、この言葉はたぶん初めてかと思います。条件付きの愛情は、親の期待通りに子どもが成果を出したときに褒めるのです。そうじゃないときは褒めません。これは親がよくやっけてしまいがちですが、こうなると子どもに送るメッセージが、結局ありのままのあなたを愛していますよというメッセージになりません。手柄を立てたときは愛します。手柄を立てないときには愛しませんというメッセージになってしまいます。だから親の期待に添っていようが、添ってしまいが、そんなことに関係なく、そのままを認めてあげることです。

親や大人の目に映る良い子と呼ばれるタイプの子は、一生懸命親や周囲の大人たちの期待を読み取るのに長けている子です。だからいつも大人の顔色を見ています。それで期待を読み取り、一生懸命応えようとします。応えることで愛され、求められるからです。極端な子は、自分を殺してまで大人の期待に応えようとします。我が家の中で生き残るためには、両親の期待に添わないと生き残れないのです。どんなに親が期待をかけても、それは親の勝手、俺はそんなことしないよと言える子はひきこもらないです。従順に尽くすタイプの子がひきこもります。自分のお子さんが良い子だと思っている方と聞くと、ほとんどの皆さんが手を

挙げますが注意が必要です。

親からも自分に対しての承認を得られていないと感じた子たちは、他者評価に対して非常に過敏になります。過敏になると、周りに対して自分が気持ち悪い人だと思われる、全然関係ない通りすがりの人がたまたま2、3人そこで話しているのを見て、自分のことを言っている、自転車が目の前を通っただけで、俺のことを笑ったと言うのです。現実はそのようなことありません。でも他者評価に過敏になった子は、自分に向けられる視線や声が、全部ネガティブな声であり、思いだと感じてしまうのです。全部自分に向けられる内容がネガティブなものとなると、もう外には出られなくなってしまいますから、バスや電車に乗れない子も多いです。

他者評価に対する過敏さと同時に、他者評価への依存も強くなってきます。他者評価への依存は、自己認識が他者評価を基準にしないとできなくなります。常に自分を自覚するために、他者評価に委ねないと、自分をしっかり評価できないわけですから苦しいです。他人の評価は無責任な評価が多いし、当てにならないし、先ほどの欲求と同じで100人いれば100人違います。いちいち他人の評価でしか自分を判断できなくなれば、これはもう集団には入れられないのです。不登校の子たちが教室に入れないのは、他人の視線が評価を意味しているからです。そもそも学校は管理と評価の世界です。成績や一挙手一投足が常に管理され評価されています。ただでさえ他者評価へ過敏になっている子が、他者評価でしか自分を認識できない状態になると、到底集団の中に身を置くことはできなくなります。人からネガティブな思いは抜けないですから、対立を過度に避け争わなくなります。意見も出さないし、全てOKでNOが言えなくなります。ラーメンとうどんどっちが食べたいと聞いても、あなたと同じでよいと言うのです。

意見を出さないことは、自分の意見を抑え込むことで、主体性の欠如ということになります。これだけ承認されることに対して渴望してしまう大本がどこにあるかと言うと、それは乳児期です。基本的信頼感は乳児期に形成されますが、どういうスタイルで自分が生きていくかの基礎が乳児期に出来上がります。基本的信頼感の一つは、自分が愛されているかです。ベビーベッドを覗き込む、パパ、ママ、おじいちゃん、おばあちゃんの顔。これで自分が愛されていることをキャッチするのです。泣いたときに放っておかれたら、周囲は信頼できないのです。自分が危険なときにすぐ助けの手を差し伸べられたら、子どもは安心感を得ますが、そうでなければ、どうやら自分はここに誕生したけれども、自分が身を置くこの家は安全ではなさそうだ。自分を覗き込む顔が険しかったり、パパとママの争いの声が響いていると、どうやら自分は快く受け止められていないということをキャッチするのです。そのことで、その子の生き方の姿勢が出来上がるということです。

ひきこもりや不登校は病気ですかという話があります。もちろん病理的なことからそういうことになっていることもあります。全部が全部病気ではありません。ひきこもる行動そのものが一つの治療法なのです。治療法を治療するのはおかしいわけで、ひきこもるという行動そのものが自己治療なのです。自分を喪失している病で、周囲の親や大人から承認を得られずに自分を見失っているのです。その病を治すために、一つの治療法としてひきこもる行動を選択しているのです。

私はモビールの法則ということの説明しているのですが、天井から吊り下げる飾りがあります。このモビールは、例えばある部分を切ってしまうと、全体が落下してしまいます。これは家族も同じです。良い悪いは別にして、家族はバランスが取れているわけです。悪いバ

ランスの一つが、例えば最近のDVです。殴る旦那と殴られる奥さんも、一応それでバランスは取れていますが、それは悪いバランスです。だれかが一人、不登校かひきこもりになると、この子だけがストーンと落ちるわけではありません。つまり全体が関わり合って成り立っているのが家族ですから、この子だけの問題として受け止めると、不登校もひきこもりも絶対に回復しません。

この子が問題だから何とかしてくださいと、親が子どもを引きずってくるケースもあります。お父さんが、この子の根性を叩き直してくださいと来ると、私はあえて、最初にお父さんの根性を叩き直しましょうと言います。私が勝手にモビールの法則と言っているのは、家族はモビールの形でバランスが取れている。つまり関わり合って成り立っていますので、子どもたちは、家族のバランスの崩れをいち早くキャッチして、それを戻すために不登校やひきこもるという行動で治療しているのです。家族病理の治療です。家族の病を治療しようとして、不登校やひきこもりをしているのです。

不登校とひきこもりの背景にあるものとして、一つは少子化があります。少子化になると、当然ながら過保護や過干渉が起きて、過度な期待がでできます。兄弟の数が少ないと兄弟げんかかもしれませんが、けんかをしないと仲直りの経験ありません。兄弟が少ないことで、本来身に付くべきものが身に付いていないことも背景に見られるものです。

核家族化もあります。祖父母がいると、お父さんやお母さんから得られないものも得られることがあります。最近はお母さんも働いているケースが多く、祖父母との関わりがあれば、そこで父性や母性を補うこともできるのです。祖父母から伝えられるものも伝えられないことが核家族問題の中ではありません。

近隣との没交渉。子どもたちは、学校でも知らない人には付いていかないようにと言われていきますから、すぐに逃げます。皆さんも経験あると思いますが、親から教わらなくても、隣のおじさんやおばさんから教わることもありました。でも今の子どもたちはそれがいいから、社会性を育てるということでは、極めて限定される環境の中で育っているわけです。

価値観の多様化。子どもたちとの関わりやコミュニケーションを取るためには、年齢に関係なく、メールやインターネットを日常生活で使ってください。それも分からないで、子どものことは言えません。子どものことを対等に理解していくためには、携帯電話でコミュニケーションを取る時代ですから、そのことを理解する意味でもインターネットぐらいはやってください。価値観が多様化しますと、当然人間同士のコミュニケーションも複雑化します。

我々の世代と子ども世代で一番大きな違いは、選択肢の増加だと思います。職業選択や進学を選択。最近では婚活とか離活などです。配偶者選びにしても、親世代と祖父母世代でも違います。祖父母世代は親が決めた相手との結婚が当たり前だった時代です。今の子どもたちは自分で探さないといけないわけです。仕事もそうです。親世代にはなかった、横文字のIT産業等の仕事も多く、いろんな進路があるのです。その中で何かを選ぶことはなかなか大変です。昔のように大工の息子は大工、八百屋の息子は八百屋という時代ではありません。価値観の多様化によって選択肢が増えているのです。その中で子どもたちは判断基準を持つことができずに迷っていることを、是非理解していただきたいです。

最後に、大人ができることとして考えたのは、一つは、小人は大人の鏡。見た目は大人でも、中身は子どもの大人、最近モンスターペアレントという話もあります。小人と書きましたが、だんだんと大きくなるわけです。子どもたちは当然ながら、我々大人からいろんなものを見て、聞いて、真似て、今の行動を取っているのです。子どもたちの問題をあれこれ考

えようというのは、大人の傲慢さだと思います。今の子どもの状態にしたのは親と大人ですから、作った張本人が何を言っても、それは傲慢です。小人はまさに鏡で、大人をそのままを映していますので、言葉では伝わりません。小人はちゃんと大人の行動を見て、そのまま真似ています。子どもの荒れは大人の心の荒廃です。

我々は何をやっていけばいいのか。一つは生きざまを見せることです。生きがいを持って生きている姿を、子どもたちに見せることです。もし生きがいがなかったらすぐ見つけてください。ただし子どもを生きがいにはしてはいけません。

そして自己責任です。責任転嫁はいけません。夫婦喧嘩の責任を子どもの成績表にもっていったては駄目です。これも多いですが愚痴を言わないことです。

公益世務。社会に対して役に立つという発想が、今の子どもにはないのです。特にひきこもりやニートの青年たちです。社会の中で自分の個性を役立てるという発想がないから、学校を卒業しても、働かないで何が悪いのですかと平気な顔で言います。

そして自尊心、自己信頼感を育てること。自己喪失で自分を見失っている子たち、自分が大嫌いだと言っている子たちには、自尊心も自己信頼感も育てていません。この自尊心と自己信頼感を育てるのが、子育ての一番のポイントだと思います。これさえ育ててくれば、後は心配ないと思います。

敬愛、惻隠、慎独。少し古い言葉ですが、愛することにも敬うが必要です。愛するだけでは、子どもの個性を潰します。ちゃんと尊重することが必要です。惻隠は、人間が本来持っている他人の苦しみを見過ごしにできないというものです。でもどこか欠けてしまっているから、陰湿ないじめも止まないのです。慎独は、人の目は関係なく、独りの時こそ慎むということです。大人たちは、人の目や法律に触れなければと、ギリギリのところまでそういう行動を見せているから、子どもたちも真似をします。人の目はなくても自分の目があるはずで、自分の良心があるはずですが、その発想そのものがないから、人の目さえなければ何でもOKになっています。

家庭は習慣の学校。一家は習慣の学校なり。父母は習慣の教師なり。我々親は子どもに対しては習慣の教師です。不登校やひきこもりは生活習慣病みたいなものです。悪習慣の病です。その習慣を身に付けさせてしまったのが、やはり我々大人です。子どもは我々のそのままを見て、そのままを実行しています。我々は習慣の教師ですから、それをしっかり自覚して子どもたちと関わっていかねばと考えます。

子どもは長期のひきこもり青年たちの、社会参加の支援を行っています。一般的に、本人が動かないから、どうにもならないという思いがあると思います。最近アウトリーチ、いわゆる訪問支援もありますが、子どもの実績では、本人たちが親御さんたちに促されて、子どものところに来ることがほとんどです。長期化は、本人のやる気に依存しているからです。親御さんが動けば可能ですが、見守りは長期化を招くだけです。見守りは、問題の先送りにしかなりません。親御さんが関わりを始めたら、家庭内暴力の親子関係であっても、ほとんどの青年たちが動けます。殴られているお父さんやお母さんに伴われて、青年たちは自分の足で我々のところに来ています。親御さん次第です。長期化を食い止めるためには、親御さんさえお子さんの状態を理解して、適正な関わりをすればほとんどのひきこもりは解決につながります。それを是非知っていただきたいと思います。

参加者 ひきこもりとかそういう子どもたちを育てたのは、自分の家庭の自己責任だというお話だったと思いますが、そういう親は、なかなかこういうところには出られ



ないと思います。自己責任ということで、先生が今まで対応された問題で何かありましたらお願いします。

何でもかんでも自己責任と言われている向きはありますが、自己責任は大事です。社会も私たちの家庭も単独で成り立っているわけではありません。社会の中で家庭もつながって、係わり合ってみんな生きています。自分が動いて解決できることは、当然ながら自己責任でやっていくべきです。

社会生活の中では、当然自力だけでは何ともならないことがあります。家庭も自己責任論になってしまったら、不登校もひきこもりも自己責任で、お前が何とかしろということになります。そのお前が何とかしろというスタンスが、長期化をどんどん招いているのです。

例えば、母親の過保護や過干渉で、子どもが不登校やひきこもりになったとします。そうしたら、お前が甘やかすからこうなったと言われます。母親もその自覚があるのですが、母親が悪いのか。問題はどのようにして過保護や過干渉になったかです。父親が母親を構わなくなったからです。妻に対する敬意、妻として母親としての立場を尊重する姿勢がなくなって、関心までなくなる。結婚記念日や誕生日も忘れる。私はお母さん方に、一回坊主頭にして帰ってみてください。それでも気づかないかも知れませんよと言います。

母子密着になる背景には、父親の存在があるのです。父親が家庭サービスをできなくなった背景には企業側があるのです。ある経営者の方から、どうしても社員である父親たちを早く帰せないことで、その家庭のお子さんが不登校やひきこもりになっているという相談を受け、経営者として本当に申し訳なく思っているという話がありました。

お父さんがなかなか家に帰れない背景には、企業側の問題や社会の問題があるわけです。それが互いに係わり合っていますから、何でもかんでも自己責任で、当事者一人の問題にしてしまうと問題があります。行政、学校、医療、我々民間も連携して流れを作って、みんなが子どもたちを支えていくシステムを作らない限り、過度な自己責任論でも解決はできないと思います。